

## 『腎病理をどう臨床に活かすか』



2列目左から市川先生，柴垣先生，上野先生  
1列目左から長田先生，片瀨先生，清水先生

糸球体腎炎をはじめとする非腫瘍性腎疾患は、病理組織学的所見が重要な役割を担っている。腎生検病理診断は、障害の程度や質などを正確に把握する唯一の方法であり、病理診断のなかでも特殊性を有するため、病理学と腎臓学の両方に対するより高い見識が要求される領域である。腎生検病理診断によりの確な疾患名を決定し、患者に有益な情報として還元するためにはどのようなスキル、知識、体制が必要か—エキスパートの先生方にベテランと若手、臨床と病理それぞれの立場から討論いただいた。

### I はじめに

柴垣——日本腎臓学会が開催する「腎病理夏の学校」が大変人気を博していることから窺えるように、特に若い内科医の「腎病理」に対する学習意

出席者（発言順，敬称略）

**柴垣 有吾（司会）**

Yugo SHIBAGAKI

聖マリアンナ医科大学腎臓・高血圧内科 教授

**市川 大介**

Daisuke ICHIKAWA

聖マリアンナ医科大学腎臓・高血圧内科 助教

**上野 智敏**

Toshiharu UENO

虎の門病院腎センター内科

**片瀨 律子**

Ritsuko KATAFUCHI

国立病院機構福岡東医療センター腎臓内科 部長

**清水 章**

Akira SHIMIZU

日本医科大学解析人体病理学 教授

**長田 道夫**

Michio NAGATA

筑波大学医学医療系腎・血管病理学 教授

欲は非常に高いといえます。しかしながら、すべての人が広範な知識と医療技術を兼ね備えるための十分なトレーニングが受けられない状況にあって、内科医がどのようにして腎病理を正しく学ぶかは大きな問題となっていると考えられます。

そこで本日は「腎病理をどう臨床に活かすか」を